
僕は神を知っている

赤井葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は神を知っている

【Nコード】

N8981Z

【作者名】

赤井葵

【あらすじ】

この世界に神を信じている人はどれだけいるだろうか？新庄界という少年は信じていない側の人間だった。だが、ある事件をきっかけに新庄界の中に神が入り込み、神が入り込んだ新庄界は「神の器」として悪魔の討伐をしなければならない。新庄界の平凡な日常は崩れ去り、新たな物語が今、動き出す。

第一話〜祈願〜（前書き）

こんにちは。赤井葵です。

今回この「僕は神を知っている」が初投稿です。まだまだ未熟で乱文になってしまうこともあると思いますが、どうか温かい目で読んでください。

第一話　祈願

新庄界：ごく普通の高校生。特に目立つものがないことにコンプレックス

を抱いている。

花岡すみれ：色白で肩ぐらいまでの茶髪的女子高生。界と同じクラス。い

ろいろあつて界の初めての友達となる。

ヘファイストス：炎と鍛冶の神。

ープロローグー

宗教の信者を除いてこの世界に神や悪魔といった類のモノがいると信じている人はどれくらいいるだろうか。

おそらく、ほとんどの人が信じていないと思うが、誰しも一度は信じてもない神に祈ったことがあるはずだ。自分ではどうしようもなくなくなったとき、頼ってしまうのは間違いなく神だ。

僕も頼った。頼るしかなかった。そして、願った。願うしかなかった。必死に願った。僕にはそれしか出来なかった。僕には一人一人も助ける力すらなかった。だから願った。「力を貸してくれ」と。

第一話　祈願

僕の名前は新庄界。15才の高校一年生。いや、正確には入学式がこれからだからまだ高校一年生ではないか。僕はここ新木市でもそこそこの進学校に入学する。志望理由は単純に家から徒歩で行ける距離にあるということだ。とくにこの高校でやりたいことはない。

というより、元々友達も少ないのでやれることも少ない。学校生活は友達なしでも問題はないのだ。（検証済み）

歩いて10分後、学校の校門が見えてきた。

「それにしても、この学校、私立だとしても綺麗すぎるだろ。名前も聖秀学園とか格好いいし。」

僕は学校に見惚れていた。だから気づかなかった。背後から自転車が猛スピードで突進してきていることに。

「ぐっ!!」

背中 to 大きな衝撃が走った。僕は見事に前方に飛ばされ、頭から地面に落ちた。

「あー……ここで死んでしまうのか……できることなら、もう・少し……生きて……」

「……ここは？」

目の前には真っ白な天井が広がっていた。どうやら、どこかの部屋のようなのだ。

「やあ、やっと目が覚めたようだね。」

白衣を纏った白髪のおじさんが部屋の隅に座っていた。

「あのお、ここは？」

「見ての通り、病院だよ。君は奇跡的に気絶しただけで、怪我もほとんどしていなかったんだよ。」

「じゃあ、僕、生きてるってことなのか……?」

「はははっ、そういうことだね。最近の若い子は頑丈だよ。」

あれだけ飛ばされて頭から落ちたのに僕はほとんど無傷に近かった。日頃、運動もしていないのに頑丈だとは思えない。一体何が……

「とりあえず、今日のところは大丈夫そうだし家に帰っていいよ。また何かあったらここに来なさい。」

「あ、はい、分かりました。ありがとうございます。」

僕は不思議に思いつつも、この病院をあとにしようと病室から出た。すると病室の前に少女が座っていた。

「今日は自転車で引いてしまつてごめんなさい。ほんとに怪我がなくてよかつたです。」

「どうやら、この子が僕を引いたようだ。」

「大丈夫。気にしないで。ところで、名前は？同じ高校の制服だね？」

「あ、私は華岡すみれっていいいます。ちなみに、一年B組です。」

「僕は新庄界。華岡さんよろしく。」

「はい、よろしく願います。同じクラスっていうのも奇遇ですね。」

「そうなの？じゃあ、僕も一年B組なんだ。」

「はい。私、引越してきたばかりで友達もいないので、こつやつて話せる人がクラスにいてよかつたです。」

二人で話しているといつの間にか病院の外に出ていた。

「じゃあ、私、こつちなので。また明日。」

「うん、じゃあね。」

もう空はオレンジ色になっていた。住宅地内で遊んでいる子どももみんな家に帰る頃なので、辺りは静まりかえっている。

病院は家の近くにある病院だったらしく、家に着くまで時間はかからなかった。

「ただいま。」

鍵を開けて家に入ると、いつもは仕事でまだ帰つてこないはずの母さんが家にいた。

「あら、おかえりなさい。病院行けなくてごめんね。母さん、今帰つてきたの。」

「別にいいよ。それより、なんでこの時間に居るの？」

「会社が火事になっちゃったの。だから、しばらくは仕事お休み。」
「火事？大変だったね。母さんが無事でよかったよ。」
「あら、ありがと。」

この年になると親にお礼を言われるだけで恥ずかしくなるので、僕はすぐに自分の部屋に向かった。

「はあ、今日はトラブル多いな。」

僕はその時、微かに不安があった。その理由はわからない。だけど体がそう感じるのだ。

「少し寝よう。疲れてるのかもしれない。」

僕はベッドで大の字になって目を瞑った。本当に疲れていたのか、すぐに眠りについた。

「・・・い・・・か・・・い」

誰かが僕を呼んでいる。

「誰？」

「貴様の願いはなんだ？」

「僕の願い・・・？」

「そうだ」

果たして、この僕に願いなどあるのだろうか。僕に望むものはない。仮に、望むものがあつたとしても、僕なんかの願いは叶わない。

「僕に、願いは、ない。」

「そうか。だが、いずれどうしても叶えたい願いが出てくるだろう。」

「

「・・・なんだ、夢か。」

もうすでに時間は9：00を過ぎていた。

「飯食べ損ねたな・・・」

我が家ではだいたい7：30から夕食を食べると決まっている。と

は言っても家に居るのは母さんと僕だけだ。親父は海外に出張に行
ったまま行方不明になっている。僕は親父がどんな仕事をしている
のか知らないの、親父には不信感を抱いていた。

母さんも親父のことをよく知らないらしい。母さん、よく結婚する
気になったな。

「適当にカップ麺でも食べるか。」

僕は自分の部屋から出て、一階のリビングに向かおうとした。

「バリントッ!!」

家中にガラスが割れる大きな音が響いた。

「きゃああああ!!!」

「!?!」

母さんの悲鳴が聞こえた。僕は急いで母さんのいるリビングへ向か
った。

「おい・・・なんなんだよ・・・これ」

僕がリビングに着いたとき、母さんが浮いていた。いや、持ち上げ
られていた。3メートルはあり、人型の獣のような黒い化物に。僕
は状況が理解出来なかった。それどころか、身体が動かなかった。

目の前で母さんが殺されかかっているのに、助けようとすることも
出来なかった。

「・・・か・・・い・・・に・・・げ・・・て」

母さんは首を締められている中で僕に言った。母さんは僕を必至に逃
がそうとしている。それでも僕の身体は全く動いてくれなかった。
化物が母さんの首を締めている手の力を強めていく。

母さんの抗っていた手が動かなくなっていた。

「・・・助けてくれよ・・・誰か助けてくれよ・・・なんでもするか
ら・・・母さんを助けてくれよ!!!」

僕は力の限り叫び、神に願った。

「その願い、叶えてやろう」

夢の中で聞いた声がした。

そして僕の左手には剣が握られていた。それに気付いた時には身体が勝手に動き、化物の背後に回った瞬間、僕の左手の剣が化物を貫き、化物を一瞬で燃やし尽くした。

「か、母さん！！しっかり！！」

僕はまだ理解出来ず混乱していたが、母さんが危ないのは理解出来た。

「界・・・なのね・・・逃げなさいって・・・言ったのに・・・」

母さんはこんな状況でも僕の心配をしていた。

「ごめん、母さん。身体が動かなかったんだ。それに、母さん一人置いて行けないだろ。」

「そう・・・ありが・・・と・・・う・・・」

「母さん！？」

母さんはその場で意識を失った。

「まだ意識はないみたいだ。いつ目覚めるか分からない。命に別状はないとも言えない。でも大丈夫。この私が何とかしてみせるよ。」

「さっきの白衣を着た白髪のおじさんは、病院のロビーに座っている僕を慰めるように言った。」

「私は、日渡だ。これでも一応、医学界では有名な医者だよ。」

「そうだったんですか。」

「だから、私に任せなさい。必ず、君のお母さんは救って見せる。」

僕はその言葉に返事をせずに病院をあとにした。

僕は普通に生きることすら認められていない人間なのかもしれない

い。僕は不幸でないといけないのかもしれない。僕という人間はこの世界で必要とされていない存在なのかもしれない。だったら、いっさいない方が・・・

（それは許さん）

「え・・・夢の中の・・・」

（そうだ）

「いったいあなたは誰なんだよ。どこにいるんだよ。」

（私は、神だ。名はヘファイストス。今は貴様の中にいる。）

「神？僕の中にいる？どういうことだよ。」

（貴様、自分で願っただろう。助けてくれ、なんでもするからと。だから、その願いを叶えたのだ。）

「ちよつとまって、じゃあ、なんで僕の中にいるんだよ。」

（貴様がなんでもすると言ったから、神の器になってもらったのだ。「神の器？」

（そう。神は簡単にはこの世界に降臨することはできない。神が降臨すれば、この世界は神の力に耐えられず、破滅してしまう。そこで神の器が必要になる。神はその器に入ること、自身の力を抑えることができる。）

「でも、なんで僕なんだよ。」

（神の器は誰でもよいというわけではない。強く願った者が器となる。）

「なんだよそれ・・・」

僕は歩きながら、自分はどうしてもないモノに願ってしまったのだと気づいた。僕はこれから、どうすればよいのだろう。とりあえずは家に戻って寝るのが先だ。

（今日は貴様も疲れているだろう。今日のところは休め。明日続きを話そう。）

僕はその言葉を無視した。家に着くとすぐさま自分の部屋に入ってそのまま眠りについた。

第一話〜祈願〜（後書き）

どうだったでしょうか？

短いと感じた人もいると思います。なるべく期間を空けずに投稿していきたいと思います。これからもよろしくお願いします。

第二話く役割く（前書き）

こんにちは。赤井葵です。

「僕は神を知っている」第二話です。一話の題名が二字だったので二話も二字にしてみました。

これから二字縛りにしようかなあと考えています。それでは、第二話もお楽しみください。

第二話　役割

第二話　役割

（・・・き・・・ろ）

誰かが何かを言っている。

「なんだよ。僕は眠いんだ。」

（起きろ！！）

「うわっ！！な、なんだ！？」

（もう、朝だぞ。）

どうやら、自称神が僕を起こしたらしい。ということは、昨日の出来事は夢ではないみたいだ。

（何をぼさつとしている。今日も学校あるだろ。）

「今思ったんだけど、僕、お前と話す時、実際に話さないといけないの？」

（そんなことはない。言いたいことを心の中で言えばよい。）

（なるほどね。）

実は内心、独り言みたいで嫌だなと思っていたが、その心配はしなくていいみたいだ。

母さんがいない今は朝食はちゃんと食べることができない。これは僕が料理できないわけではなく、朝早くに起きられないのが原因である。

「今日はヨーグルトだけでいいや。」

（そんなので大丈夫なのか。）

（僕、少食な方だから。）

さっさと食べ終わり、身支度を始めた。

「これなら、走れば間に合いそうだ。」

全ての準備を終えるのにシャワーを浴びたおかげでいつもより時間がかかった。

「じゃあ、いつてきます。」
誰もいない家にそう告げた。

「はあ・・・はあ、日頃運動しないとこれだけで疲れるな・・・」

（弱いなあ。）

（うるさいよ。）

神はいちいち口を挟んでいる。今だ自分の心に直接話しかけられるというのに慣れていない。

それにしても入学式に出ていなかった僕はクラスで目立ってしまうだろうか。それだけはなんとしても避けたい。僕は静かに学校生活を送りたいのだ。

（それは難しいだろう。）

（おい、人の心読むなよ。）

いや、もしかして言いたいこと以外も筒抜けなのか？違うと信じた
い。

今、僕は教室の前にいる。なかなか教室に入る勇気が出てこない。みんなと一緒に入学式に出ていれば話は別なのだが、初日休むだけで、もはや転入生である。こうしている間に、時間は過ぎていく。

「よし、行くか。」

教室に入った瞬間、みんなの視線は一斉に僕に集まった。きっと今の僕の視聴率100%だろう。

僕は気にしないように黙って席に座る。やはり新入生の机には名前が書かれたシールが貼られていた。実にありがたい。これがなかったら、「僕の席どこ？」と聞かないといけない。

僕が席に着いた直後に朝礼のチャイムが鳴り、クラスの皆が席に着き始めた。

「おはようございます、新庄くん。」

どうやら、左隣の席は花岡さんらしい。

「おはよう、花岡さん。」

花岡さんは挨拶を済ませると前を向いて先生の話聞いていたので僕も黙って前を向いた。

「あー・・・疲れた・・・」

（そんなに疲れる内容だったか？勉強なんてほとんどなかったではないか。）

急にヘアアイストスが話し始めた。やはり少しは配慮してくれていたのだろう。そうしてもらわないと困るのだが。

（だからだよ。普通に授業やってたら、誰とも話さなくていいだろう？でも、クラスの決め事とかは周りの人と話し合わないといけないじゃないか。）

（花岡とかいうやつとしか話してないではないか。）

（まあ、そうだけど。）

神との会話を終え、僕は食堂に向かった。ここ聖秀学園の食堂のメニューは結構豪華だという噂がある。そうなるかと確かめたくなるのが人間だ。少し歩くペースを早めた。

食堂はメニューだけでなく、内装まで豪華だった。食堂内にはお茶することができる場所までついていた。これほど豪華な食堂はなかなかないだろう。

「さて、どれにしようか・・・」

品揃えがよすぎるというのも意外と困りものだ。

僕は迷った末、定番のカレーライスを注文した。

「・・・なんだこれは・・・」

見た目はごく普通のカレーライスなのだが、味が全然違う。カレーライスを超越したカレーライスみたい感じた。とにかく旨い

「あ、そのカレーライス、美味しいって評判ですよ。」

僕が夢中に食べていると花岡さんが自分のお昼を持って席に座った。
「相席いいですか？」

「うん、全然いいよ。ところで、その、敬語やめてくれないかな？
そういうのあまり好きじゃないんだ。」

「分かった。じゃあ、改めてよれしくね、新庄くん。」

花岡さんは満面の笑みで言った。花岡さんはおとなしい人だと思ったけど、笑顔がとても似合っている。

「どうしたの？早く食べないと昼休み終わっちゃうよ？」

「あ、ぼーっとしてた。」

本当は花岡さんの顔を見ていたんだけど。

僕たちはその後、世間話をして昼休みを終えた。

（午後の授業は一時間だけなんだな。）

（今日は始まったばかりだから特別らしい。）

午後の授業は普通の授業で数学だった。僕は数学が結構好きで得意だったので、苦ではなかった。

（後で話がある。昨日の続きだ。）

ヘアリストスはいつもより少し低い声で言った。

（分かった。）

僕は最小限の返事だけをした。

僕は下校時刻になるとすぐに帰宅した。正確にはすぐに下校したかったが、花岡さんが「一緒に帰ろう。」と誘ってきたので、断る作業で多少時間を使った。

（で、昨日の続きを話してくれよ。）

僕は学校から少し歩いてから言った。

（そうだな。貴様には神の器としての仕事をしてもらわないといけ

ない。)

(なんだよ。その仕事っていうのは。)

(まあ、簡単に言っと、悪魔の討伐だな。)

(・・・悪い、もう一回言ってくれ。)

聞き間違えだと信じたかった。

(だから、悪魔の討伐だ。)

(それ、本気で言ってるのか?)

聞き間違えではなかった。ヘファイストスは確実に”悪魔の討伐”と言った。

(もちろん本気だ。貴様には神の器としてやってもらう必要がある。これは義務だ。)

(なんでだよ。僕は絶対そんなことしないぞ。)

悪魔の討伐なんて死んでもやりたくなかった。

(貴様には断る権利はない。貴様は私と契約を交わした。貴様の願いを叶える代わりに貴様は私の器になるというな。)

(・・・)

何も言えなかった。ヘファイストスの言うことは筋が通っていた。

(それでも断るといふのであれば、願いを取り消すしかないな。それはつまり貴様の母親はあそこであの悪魔に殺されていたけとなる。さて、どうする?)

(!?!?・・・分かったよ。)

さすがに、母さんが殺されるのは嫌だった。・・・?まで、今こいつ、悪魔って言った?

(おい、今、あの時家に居たのは悪魔って言ったのか?)

(あれは悪魔だ。下級悪魔だな。)

(それはつまり、僕は既に悪魔を倒しているのか?)

(そういうことになるな。)

僕は既に悪魔を討伐していた。

(じゃあ、あの時の剣と炎はお前の力?)

(そうだ。貴様はあの時には既に神の器だ。)

あの時は混乱していてよく考えられなかったが、今考えると全てこいつの力だと気付いた。

（貴様の仕事は神である私の力を使って悪魔を討伐することだ。悪魔は私が感知できる。貴様がわざわざ探すことはない。）

（俺にお前の力なんて使いこなせないと思うけど。）
普通に考えて神の力なんて使いこなせるはずがない。

（普通の人間は使いこなせない。だが、異常な人間ならどうだ？ 貴様は神の器になった瞬間から使っていたらう？ 貴様は異常な人間なのだ。）

ヘファイストスは僕が異常だと言った。これといって特に目立つ特徴も特技もない平凡な僕を異常だと言った。別に褒められてはいないのに何故か少しだけ嬉しかった。

（・・・じゃあ、やれることはやるよ。）

（それでこそ我が器だ。）

この時から僕の神の器としての物語は動き出した。

第二話〜役割〜（後書き）

第二話どうだったでしょうか？まだ序盤ということもあり、いまいち盛り上がっていませんが、今後戦闘シーンも出てくるので楽しみにしてください。

第三話　始動

第三話　始動

僕は悪魔の討伐を言ったものの正直、悪魔に対してどう戦えばいいのかわからない。適当に戦うだけではきつと勝てないはず。ヘファイストスは戦い方を教えてくれるだろうか。

僕は夕食を作っている時そんなことばかり考えていた。今日の夕食はカツ丼だ。美味しい上に作るのは簡単という素晴らしい料理だ。

「じゃ、いただきます。」

一口目からガッツリ食べた。

「今日はなかなか美味しくできたな。」

誰も食べてくれる人がいないので自画自賛した。僕はそれから黙々とカツ丼を食べた。食べ終わると食器を片付けて一服するためにソファーに向かった。

（・・・界）

ソファーに座ろうとした時ヘファイストスが僕を呼んだ。

「何？」

（早速お出ましのようだぞ。）

「・・・悪魔か。」

（ああ。）

意外と早く来たことに僕は驚いた。悪魔というのは結構いるのだから。

「場所は？まさか住宅地内じゃないだろうな？」

（・・・いや、貴様の学校だ。）

「学校！？」

自分に関係のある場所に驚きを隠せなかった。

（この時間は先生とかいるんじゃないか？）

今の時刻 8 : 05

「多分、新学期の始めで仕事も少ないはずだからいないと思う。」
（よし、では、さっさと行くぞ。）

学校に辿り着くには5分くらいだった。案の定、先生方も帰った後らしい。

「はあ、はあ、悪魔はどこにいるんだ？」

（恐らく校内だ。）

僕はそれだけ聞くと校内を目指して走りだした。

「夜の校内は暗くて見にくいな。」

夜の校内は月明かりがあっても暗く、今走っている廊下は月明かりのせいで妙に気味が悪い。

（・・・きた。）

ヘファイストスの声と同時に正面の曲がり角から黒い犬のような生き物が現れた。

「あれ、悪魔なのか？」

その生き物は赤い目で僕を見据えていた。

（あれはケルベロスの子どもだ。どうして、こんなところに・・・）

「？　じゃあ、あれ倒さないといけないのか。」

ケルベロスの子どもは遠吠えをしてから僕に突進してきた。

「ヘファイストス！」

（分かっている。）

ヘファイストスの言葉に続くように僕の手の中に剣が現れた。

「はああああ！！」

僕は迷わず突進して飛びついてきた悪魔に剣を振りかざし、タイミングを見計らって振り下ろす。

剣は悪魔を真っ二つに引き裂いき、悪魔はすぐに蒸発するように消滅した。

「意外と呆気ないものなんだね。」

僕はもつと激しく苦しい戦いを想像していた。

（界！後ろだ！）

「えっ？」

後ろを振り返った時には既に遅く、僕の腹部に悪魔が突撃した。

「ぐっ！！」

あまりの衝撃に僕は後ろに飛ばされ、少しの間呼吸が出来なかった。

（すっかりしろ。油断するな。）

前を見ると同じ悪魔が四匹いた。どうやら、さっきの遠吠えは仲間を呼ぶためのものだったらしい。

「まだいたのか・・・」

（仕方ない。少し荒技を使うか。）

今度は四匹同時に突進してきた。

（界！剣を振りかざせ！）

僕は言われた通りに剣を振りかざした。そして剣の刃には炎が纏っていた。

（今だ！振り下ろせ！）

悪魔が飛びついてきたタイミングでヘファイストスが言った。

「うおおおお！！」

僕は力の限り振り下ろした。

剣を纏っていた炎は振り下ろした時に巨大化し、悪魔を一掃した。

「・・・すごい。」

（今のは豪爆炎といって、神術の一つだ。剣に纏っている炎の瞬時に巨大化させることができる。）

ヘファイストスは落ち着いた声で言った。

「でも、これヤバくないか？」

肥大化した炎は廊下ごと燃やしていて、廊下は全焼し焦げくさくなっていた。

（やり過ぎたかもしれんな。）

「早くここから逃げよう。誰かに見られたら大変だよ。」

警察に通報なんかされたら、僕の人生は終わりである。

（・・・ああ、そうだな。）

僕はヘファイストスの曖昧な返事に違和感を感じたが、気にせずその場を去った。

家に着いた時は10:00頃だった。僕はすぐに風呂場に向かった。

「あゝ動いた後の風呂は気持ちいな。」

日頃運動をしない僕はあまりこういうことを感じることは滅多にない。

（おい、貴様に聞きたいことがあるんだが。）

「こんな時なんだよ。」

（貴様、あれ程やる気なかったくせに今日はノリノリだったじゃないか。）

悪魔討伐の話かと思っていたが、全く違った。

「それは・・・自分でもよく分からないけど、悪魔は倒さないといけないって思うんだ。だから身体が動いてしまうんだよ。」

（そうか。）

ヘファイストスはそれだけ言うと黙っていた。

僕は風呂から上がり、歯磨きなどをした。

それを終えてからテレビを見ようとしたが、明日のためにも今日は寝て疲れた身体を休めることにした。

「あーよく寝た。」

翌日、いつもより早く寝たせいか通常の一時間も前の6:00に起きた。

「暇だしテレビでも見るか。」

朝のテレビはニュースが多かった。

仕方ないのでニュースを見ることにした。

「今朝方、東京都新木市内の高校から焦げくさい臭いがすると住民から通報がありました。警察の調べによると、学校の二階の廊下が全焼しているのみで、警察は調査を急いでいますが今は原因不明とことです。」

「・・・・・・」

「どうやらもうバレしてしまったようだ。」

「やっとか。」

「捜査とかで学校はしばらく休みかな？」

その後連絡網が回ってきた。ニュースで出てきた事件の話だった。案の定、学校は休みになった。学校が始まる日時は未定らしい。

（学校も休みになったし、悪魔討伐に専念できるな。）

「はあ、やっぱりするるか。」

ヘファイストスが何を言うかはだいたいの予想できた。

（だが、今回は待つのではなく探す。）

「なんで？」

（恐らくこの周辺には本来現界してはならない悪魔が現界している。）

「・・・・・・」

僕はそれがどれだけ大変なことか察した。

（地獄の番犬ケルベロス。こいつだ。）

「じゃあ、昨日のやつはそのケルベロスの・・・」

（ああ、そうだ。だからケルベロス本体もこの周辺にいる可能性が高い。）

「・・・・これからケルベロスを探すのか。」

（一刻も早くな。）

ヘファイストスがこれほど言うのだから、今まで戦った悪魔とは比べものにならないくらい強いのだろう。僕は不安だった。

「どうやって探す？」

（とりあえず、この周辺を散策する。私たちにやつが近づいたら指示を出そう。）

「じゃあ、外に出よう。」

外に出たのはいいものの、目的地がないとどこに行けばいいか迷ってしまう。

（ねえ、ほんとにこれでいいの？）

（あ、ああ。今はこれが最善だ。）

ヘファイストスの言葉はどこか頼りなかった。

（悪魔の活動は日没後だ。日の出ている間は現れない。）

（え……。っていうことは今は探しても意味ないんじゃない？）

ヘファイストスが何を考えているのかよく分からなかった。

（いや、やつが現れた形跡があるか探す必要がある。）

（へえーそうなのか。）

とりあえず僕は町外れの裏山に向かった。なんとなく僕のイメージでは裏山とかにいそうな気がした。

（こことかどうかな？）

（まずここから探すか。）

ヘファイストスは反対すると思っていたので僕は驚いた。

「ねえ、もしかして、君たち
ケルベロスさがしてる？」

「！？」

（！？）

正面の木の太い枝の上に若い男が立っていた。

だが、僕たちが驚いたのはその少年が言った言葉だ。

「……あなたは一体……」

「おっと失礼。僕はアキト。君と同じ神の器さ。」

男は自己紹介をすると木の上から飛び降りた。

「神の器!？」

「そんなに驚くことはないだろう？神が一人とは限らないさ。」

「確かにヘファイストスもそんなことは言っていなかったけど・・・」

「君の相棒はヘファイストスなんだね。」

僕の独り言にアキトという男は反応した。

「ここで会ったのも何かの縁だし、協力してケルベロス不倒さないかい？」

はたしてここで会ったのは偶然だったのだろうか。

（今はこいつの誘いに乗るのも悪くない。）

（お前が言うなら・・・）

「分かりました。でもどこにいるのか分からなければ倒しようがないんじゃない？」

「大丈夫。今夜、新木市の中央公園に必ず現れるから。じゃ、今夜9時に中央公園入り口で待ってるよ。」

そう言っアキトという男は山の奥に消え去った。

（・・・あいつ、ただものじゃないな。）

やはりヘファイストスもそう思っていたみたいだ。

（僕もそう思う。）

僕の頭の中はケルベロスよりアキトという男のことでいっぱいだった。

第四話〜同盟〜（前書き）

ごめんなさい。第三話でアキトの紹介するのを忘れてしまいました・
・・・

なので、第四話で紹介しようと思います。

第四話〜同盟〜

アキト：金髪のロングヘアでさわやかな笑顔が似合うイケメン。年齢は不明。

第四話〜同盟〜

「あと30分か。」

僕はあれから裏山を後にして、暇つぶしに新木市一のショッピングセンターに向かった。「どうせなら食材でも買っていくか。」と思い、ショッピングセンター内のスーパーに入ろうとした時に偶然にも花岡さんと会った。何故か知らないが、どうせなら遊ぶ？という流れになったのでショッピングセンター内のゲーセンで遊んだ。僕はゲーセンには全く行かない人種だったことに花岡さんは驚いていた。今思うとこれはデートなのだろうか。いや、向こうはそんなことを考えてないか。

それにしても噂には聞いていたがあそこまで金がなくなるとは。ゲーセンは恐ろしいところである。それでも花岡さんの笑顔がたくさん見れたので良しとしよう。

楽しい時間はすぐ過ぎてしまう。

気がついた時には夕方になっていた。お互いお昼ご飯は食べていなかったなので（僕の場合は朝ご飯も食べていないが）最後にショッピングセンターの近くのファミレスで軽く食べることにした。ファミレスも家族以外の人と行くのはこれが初めてで少し嬉しかった。

ファミレスでも少し話し込んだので解散したのは午後6：00だ。

花岡さんも楽しかったのか、満足そうな顔で帰っていった。

まだお腹が空いていた僕は家には帰らず、その辺にあったコンビニ

で一番安いのり弁とコーラを買ってコンビニの駐車場でかき込むように急いで食べた。

特に急ぐ理由もなかったが、あまり駐車場に長居するのもどうかと思う。

それからはまだ全然早い、家に帰るのも面倒だったので、中央公園に向かった。

「一回家に帰ってもよかったかな。」

（公園のベンチですっと座って待つのも楽ではないだろ。）

公園に着いた時は7:00ぐらいでそれからずっと座っている。

この時間帯の公園にはほとんど人影が見当たらない。

「それにしても、アキトっていう人ちゃんと来るかな。」

（分からん。まだ信用は出来んが、こっちらも手掛かりはない以上、あそこでのつとくに越したことはない。）

僕から見てもあの人はケルベロスについて何かを知っているように見える。

「あ、そうだ、ヘファイストス、神はどれくらいいるんだ？」

気になっていたことを聞いてみる。

（残念ながら、複数いるということしか分からん。神にもいろいろな分野の神がいる。いちいち数えていたらきりがない。）

「つてことは、他にも神の器がいる可能性はあるんだよね。」

（ああ。）

僕はその時、あの人の中にはどんな神がいるのか気になった。

「ごめんね。待ったかな？」

いつの間にか正面にアキトという男が立っていた。

「あ、君の名前何？」

「・・・新庄界です。」

急に聞かれたので少し戸惑ってしまった。

「よろしく。界君。僕のことをアキトでいいよ。」

「じゃあ、アキトさんで。」

アキトさんは手を差し伸べてきたので、僕は握手に応じた。

「界君、ちょっと待っててもらえるかな。お手洗いにいきたいんだけど。」

「分かりました。」

「ごめん、ありがとね。」

そう言っているとアキトさんは駆け足でトイレに行った。

「・・・アキトさん、意外といい人かもね。」

（どうかな・・・）

へファイストスはまだ信用していないらしい。

（！？）

「どうしたの？」

（この感じは・・・ケルベロスだ！！）

へファイストスの声を合図にするかのように巨大な獣が僕の正面にあつた木々を薙ぎ倒して現れた。

「これが・・・ケルベロス・・・」

ケルベロスはトラックを遥かに超える大きさと頭が三つあつた。

（構えろ！界！）

僕の手にはいつの間にか剣が握られており、刃は炎を纏っていた。

「グアアアアア！！！！」

ケルベロスが叫んだ。

（いけ！！）

「くらええええ！！」

僕は迷わずケルベロスに突っ込み、剣を振りかざした。

「豪爆炎！！」

瞬時に炎は巨大化し、振り下ろした剣を纏っていた炎はケルベロスを飲み込んだ。

「やったのか！？」

だが、そこにはケルベロスの姿は見当たらない。

「いない!？」

（上だ!!）

「上？」

気付いたときには既に遅く、猛スピードで落下してくるケルベロスから完全に逃げることは出来なかった。

「うわぁっ!!」

直撃は免れたものの、着地した時に生じた風で10メートルほど飛ばされた。

「くっそおお・・・」

（早く立て！来るぞ!!）

ケルベロスは倒れている僕を待ってくれるはずもなく、僕に襲い掛かってきた。

ーもう、ダメだー

僕は目を瞑って死を覚悟した。

「・・・あれ？」

ケルベロスがなかなか襲って来ない。僕が目を開けたとき、目の前にいたねはアキトさんだった。

「待たせたね。界君。」

「・・・ケルベロスは!？」

「あそこで足掻いているよ。」

ケルベロスは着地した地点で倒れていた。

（まさかアキトさんが・・・）

（だろうな。）

「界君はよくやった。次は僕の番だ。」

「でも!!」

「いいから。ここで休んでいてくれ。」

（界、ここはお手並み拝見といこうじゃないか。）

ヘファイストスまで言うので僕は休むことにした。

「グアアアアア！！！！！」

ケルベロスは起き上がり、先ほどより大きく叫んだ。しかし、その叫びはすぐに消えた。今さっきまで僕の目の前にいたアキトさんも消えた。

「何が・・・」

ケルベロスはそこに倒れた。そしてそこにはアキトさんもいた。

「ふう、こんなものかな。」

アキトさんはそう言うのと僕の元に戻って来た。

「アキトさんってほんとに凄い強いんじゃないですか？」

「たまたまあいつに隙があったただだよ。あれ、いなくなってる・・・」

・

倒れたケルベロスはいなくなっていた。

「まだ生きてたか。僕もまだまだ甘いな。」

アキトさんは苦笑いをしながら言った。

（ヘファイストス、アキトさんどう思う？）

（悪いやつじゃなさそうだが、かなりのやり手のくせにどうして力を隠そうとしてるのが気になる・・・）

僕はとくに気にならなかったがヘファイストスは違うみたいだ。

「界君、君は神器同盟に加わる気はないかい？」

「神器同盟？」

「僕は各地で神の器を探しているんだ。もう既に何人か同盟に加わっている。これは悪魔の討伐をするにあたって協力し合うための同盟なんだ。」

「あの、僕なんかでいいんですか？足でまといにしかない・・・」

・

「もちろんだ。君は十分役に立つ存在だよ。」

僕はこの時今まで生きてきた中で一番の幸せを感じた。誰かに必要とされたことなんてあっただろうか。

「是非、お願いします！」

「ありがとう。これで君も神器同盟の仲間だ。」

この時は、僕は幸せしか感じていなかった。

第五話　仲間（前書き）

明けましておめでとございます。
今年も頑張っていきましょう。

第五話　仲間

ゲンリユウ：短髪の大男。見た目は怖そうだが意外と優しい。戦闘員リーダー。23歳

ユイ：銀髪で長髪の少女。口数が少ないおとなしい子。戦闘員。5歳

リコ：茶髪でセミロングのポニーテール。元気で明るい参謀役。3歳

第五話　仲間

「明日の朝6時にあの裏山の昨日会った場所にきてくれ。」

僕はあれから家に帰ってお風呂に入ってからすぐに寝ようとしたが、嬉しさのあまり興奮してたのか、なかなか寝ることが出来なかった。

「明日、6時か。」

明日が待ち遠しい。

現在時刻は午後11:30。

（貴様は浮かれ過ぎだ。）

（別にいいだろ。そういえば、神の目的って皆が悪魔の討伐なの？）

（いや、神はそれぞれの目的を持って現れる。だが、悪魔がいることはだいたいの神の妨げにしかない。だから、神は最初のうちに悪魔を排除しようとする場合が多い。）

（へえ、そうなんだ。）

（まあ、どの神も目的を口外することを嫌うがな。）

僕がヘファイストスの目的を聞こうとした時に言った。

それでも僕はヘファイストスの目的がどんなものなのか気になって仕方なかった。しばらく考えているとだんだん眠くなってきていつの間にかぐっすりと寝ていた。

（起きなくていいのか？）

「あと、五分だけ・・・」

（おい、待ち合わせあるだろ。）

「！！」

その言葉に僕は慌てて起きた。

時計を見ると時刻は5：45。

「大変だ！遅れちゃうよ！」

僕は急いで身支度を済まし、家を出た。裏山は近所なので走って五分もかからない。しかし、待ち合わせ場所は裏山の中だ。

「はあ、はあ、朝から走らないといけないなんて・・・」

（自業自得だな。）

裏山を登るころには大分疲れてしまった。

「やっと・・・着いた・・・」

「界君、お疲れ様。」

先に着いていたアキトさんは笑いながら言った。

「ごめんなさい、遅れてしまって。」

「はは、全然気にしてないよ。」

「アキトさんはまたもや笑いながら言った。」

「じゃあ、早速案内するよ。」

「え、どこにですか？」

「それは着いてからの楽しみだよ。」

アキトさんは片目を瞑りながら言った。僕は黙ってアキトさんの後について行った。

「へえ、こんなところに小屋なんてあったんだ。」

アキトさんが案内した先に小屋があった。

「もしかして、ここが目的地ですか？」

「いや、正確にはこの中かな。」

「？」

僕はその意味が全く分からなかった。アキトさんはゆっくりとその小屋の扉を開けた。

「何も無いんですけど・・・」

小屋の中は何もなく、殺風景だ。

「よく見て。あそこだけ床の色が違っでしょ。」

部屋の隅の方の床だけ他の床に比べて色が濃い。

「ほんとだ・・・」

「よく見ててね。」

アキトさんはそう言うと、ポケットから何かのスイッチのようなものを取り出し、それを押した。その瞬間、隅の床がガクッと少し下がって左右に開いき、黒い床が現れた。

「うそ・・・凄い・・・」

小屋とは似つかないシステムが床には施されていた。

「さあ、行こう。」

そう言っアキトさんは黒い床の上に立った。僕は誘われるようにその床に向かって歩いた。

僕が立つと黒い床はエレベーターのように下がり始めた。

下がること20秒、黒い床の動きが止まった。

アキトさんは僕より先に黒い床から降りて僕の方を向いて言う。

「ようこそ、我が本基地”デザリア”へ」

僕は夢を見ているのだろうか。果たしてこの21世紀はここまで発展していたのだろうか。

僕の目の前には地下都市（都市ではないが）と呼んでもおかしくない光景が広がっていた。目の前から続く大きな道は400メートルほど続いており、その道は正面に位置する大きな城のような建物に繋がっている。

「少し驚いたかな？」

アキトさんは笑いながら言う。

少しどころではない。本当に新木市の地下かどうかも疑わしい。

「ここで話すのもなんだし、行こうか。」

僕は言われるがままアキトさんについて行っただ。

「ごめんね、こんなに道がなくて。さっきのエレベーターは普段使わないから安心して。」

「あ、はい。」

僕はとつさに返事をした。

「ふう、到着。」

アキトさんはそう言って入り口の扉を開けた。

「さあ、入って。皆待ってるよ。」

言われたとおり入ると床には赤い絨毯があり、よく見る城の光景だった。

「こっちこっち。」

アキトさんは入って左にある扉の前にいた。

「心の準備は出来てるかい？」

僕が行くと、アキトさんは冗談混じりに言った。アキトさんはゆつくりと扉を開けた。

「皆、お待たせ。今日は新人を連れてきた。紹介しよう、界だ。」
そう言つてアキトさんは僕を前に出した。

「あの、新庄界です。よろしく願ひします。」

僕は丁寧な自己紹介をした。

「あれ、今日はナツミとケイはいないのか。じゃあ、皆自己紹介して。」

部屋の中央のソファに座っていた大男が立った。

「うつす。では私から。私はゲンリュウだ。よろしく。」

次にゲンリュウさんの向かい側のソファに座っていた少女が立った。

「私はユイ。よろしく。」

それだけ言つとまたソファに座った。どうやら、大人しい子みたいだ。

最後は部屋の隅の机でパソコンをやっていた少女が自己紹介を始めた。

「私はリコ。リコでいいよ。よろしくね。」

パソコンをやっていたので大人しい子かと思つたが、元気で明るい子だった。

「今日から界君いや、界を含めた7人で活動する。」

アキトさんの雰囲気がいままでとは変わった。

第六話　決行（前書き）

5日から学校が始まるので投稿が今までどおりできない（中三なので）時もあると思いますが、なるべく早く投稿したいと思います。

第六話　決行

第六話　決行

「今は五人だが、早速作戦を決行する。今回の作戦内容はケルベロスの討伐だ。先日深手を負ったケルベロスを取り逃がしてしまった。しかし、やつの体内にGPSを入れておいた。見つけ次第討伐だ。」
僕はアキトさんの変化に驚いていた。あんなに笑っていた人が今はこんなにリーダーシップを発揮している。

「リコ、追跡出来るか？」

「もちろん。姿を消していても変わらないよ。」

「そうか。じゃあ、リコは引き続き追跡を。ゲンリユウとユイ界はリコの指示通り行動だ。」

「了解」

「りよ、了解」

僕は皆より少し遅れて返事をした。返事をするて皆は外に向かった。僕が黙ってついていった。

「ゲンリユウ、中央公園の地下水路よ。」

「了解。」

ゲンリユウさんの無線にどうやら指示があったようだ。

「あの、ゲンリユウさん、リコって頭いいんですか？」

あんな小さいのに、指示を出しているのが気になった。

「ああ、リコの中には知恵や戦略の神がいるらしい。だから今のあいつは俗にいう天才だな。」

「そうだったんですか。」

それなら納得だ。少し羨ましいかも。

「さあ、行くぞ。」

城内の黒い床はどうやら地下水路に繋がっているようだ。
ゲンリュウさんに続いてユイさんと僕は走った。

「リコ、ケルベロスはどの辺だ？」

「次右に曲がってそのまま真っ直ぐ。」

「了解。」

僕たちは右に曲がりそのまま走った。

「目の前よ！」

「了解！水刃撃！！」

ゲンリュウさんは走るのを止め言った。ゲンリュウさんのその声を
合図に空中に水で出来た無数の刃が出現し、前方に飛んだ。

「ギヤヤアアア！！」

無数の刃はそれまで見えなかったケルベロスに直撃した。

「ユイ、界！追撃を！」

ゲンリュウさんは僕達に言った。

「了解」

ユイさんは手を前に出すと手から竜巻が発生し、ケルベロスを襲っ
た。ケルベロスはさらに後退した。

「うおおおお！！」

僕は剣を構えてケルベロスに突っ込む。ケルベロスも対抗するよう
に突進してきた。

（界！）

（大丈夫、僕もやる時はやるんだ！）

僕はタイミングを見計らってスライディングをした。僕を見失った
ケルベロスは立ち止まり、僕はケルベロスの下に潜り込むことに成
功した。

「はああああ！！」

僕は力の限り剣をケルベロスの腹に突き刺した。

「これで終わりだ。豪爆炎！！」

ケルベロスに突き刺さった刃の部分から炎が巨大化し、ケルベロスを呑み込んだ。

「グアアアアア!!」

ケルベロスは叫びながら消滅した。

（零距离からの豪爆炎か。考えたな。）

（まあね。）

「よくやったな。二人とも。」

ゲンリユウさんとユイさんは僕のところにきた。

「いえ、ユイさんが隙を作ってくれたからですよ。」

「ユイでいい。」

「え、ああ、分かった。」

急に言われたので戸惑ってしまった。

「じゃあ、帰るぞ。」

ゲンリユウさんはそれだけ言うと歩き出した。

（こいつら、全員かなりのつわものかもな。）

（ヘファイストスが言うくらいだからね。）

（僕も頑張らないと。）

（そうだな。）

「ただ今戻りました。」

「おかえり、皆。お疲れ様。」

アキトさんは笑顔で僕達を迎え入れた。僕達はあれから何事もなく無事に帰ることが出来た。

「皆お疲れ様」

リコは椅子に座ったままこちらを向いて言った。

「これでケルベロスの問題は解決だ。って言いたいところだけど、まだ問題は残っている。」

またアキトさんの雰囲気が変わった。

「問題って？」

「まだ、界はよく分からないかもしれないが、あれ程の悪魔となると力が大き過ぎて単体で現界するのは難しい。となると、何者かわざわざ召喚したことになる。」

「では、そいつを探すのが次の任務ということだな。」

ゲンリユウさんはアキトさんの代わりに言った。

「そうだ。」

「でも、手掛かりがないんじゃないだろうか？」

「ああ、リコの言う通りだ。そこでリコに頼みがある。新木市周辺で人が近寄らない場所を探してくれ。」

「ほいほい。任せてー」

リコはそう言うたパソコンに向かった。

「まだ動くまでは時間があるからそれまで皆はゆっくりやすんでくれ。界、君もしばらくはここにいてくれ。君の部屋も用意してある。」

「

アキトさんはそれだけ言っただけで部屋を出た。ゲンリユウさんも「体を動かしてくる」と言っただけで出ていった。

「ユイ、一つ聞いていいかな？」

「何？」

「アキトさんってもしかして多重人格？ 雰囲気が変わってるんだけど。」

「違う。アキトは今焦ってる。それだけ。」

さっきアキトさんが言っていたことだろう。

（ヘファイストス、悪魔を召喚するって人間に出来るの？）

（ただの一般人には無理だな。最低でも魔術の知識がないといけないはずだ。まあ、私の専門外だから詳しい話は分らんが。）

魔術なんてこの時代にあるのだろうか。昔はあったとかいう話を聞いたことがあるような気がするが、今は漫画やアニメでしか聞いたことがない。今では魔術はとても厨二っぽい。そんなことを考えていると、疲れが溜まっていたのか急に眠くなってきた。

「少しだけ寝るか。」

僕は座っていたソファーにそのまま横たわって寝た。

「・・・あー、よく寝た。今何時だ？」

そう言って携帯をポケットから取り出す。時刻は午後6:40

「げ、7時間以上も寝てたのか・・・。あれ、ここ、どこだ？」

僕はソファーで寝ていたはずなのに、今はベッドの上だ。部屋も変わっている。今いる部屋の方が小さく、一人用ってところだ。

「お邪魔します。」

声が出た方を向くとドアを開けてユイが入ってきた。

「やっと起きた。」

ユイはそう言っただけでベッドの横にあった椅子に座る。

「ここ、どこ？」

「界の部屋。好きに使って。」

ここは僕の部屋みたいだ。家の部屋より綺麗だ。

「誰がここに僕を運んだの？」

「ゲンリユウ。ソファで寝るよりベッドの方がいいって。」

「そうだったんだ。」

やはり見た目とは違ってゲンリユウさんはとても優しい人だ。

「それと、アキトからの伝言でしばらくは進展なさそうだって。」

「分かった。ありがとう。」

「じゃあ、また後で。」

ユイは僕の部屋を後にした。

これで本格的に僕の生活が変わり始めた。僕はその時思った。

第七話　刺客

ケイ：銀髪のロン毛で目つきが怖いのでよくヤンキーと間違えられる。謎が多い男。年齢不明。

ナツミ：綺麗な黒髪の長髪をお下げにしている。たまに位置が上がりツインテールっぽくなってることもある。17歳

第七話　刺客

僕がデザリアに来てからもう二週間が経つ。デザリアは地下にも関わらず、ほとんど不便はない。あるとすれば、買い出しに行くのが多少面倒だということだ。デザリアには裏山の小屋、地下水路、民家に通じるエレベーターがある。民家に出たときは驚いたが、この民家はアキトさんのものらしい。噂によるとこのためだけに買ったとか。

それが本当ならアキトさんはかなりのお金持ちだ。ちなみにデザリアはアキトさんのお金ではないそうだ。ただ、アキトが何らかの手を使って資金を集めて造ったらしい。皆もそこら辺の事情はあまり知らないそうだ。あの人は謎が多いな。首を突っ込まない方がよいだろう。話が半分逸れたが買い出しに行く時は民家から行っている。それが一番近い。あとはあまり気が乗らない。

デザリアにおいて食事は自分で勝手にすると決まっている。僕にとってこの決まりは大したことではないが、料理できない人にとっては苦痛の何ものでもない。

あと、二週間生活して分かったことがある。神器同盟の人たちは異常なくらいゲーム（電子ゲームを除く）が強い。話を聞くと、暇な

時は皆でゲームをすることが多く、鍛えられているそうだ。僕も強くなれるだろうか。

僕は夕飯の買い出しから帰ると、いつものように作戦室へ向かった。作戦室とは僕が最初に連れていかれた部屋だ。

「あ、やつと来た。」

僕が作戦室に入ると同時にリコが言った。

「よし、界も来たしリコ、話してくれ。」

「最近男性の変死体が発見される事件が多発しているんだけど悪魔が関わっている可能性が出てきたの。恐らく、エムプーサっていう悪魔の仕業だと思う。今回、私たちがすべきことはエムプーサの討伐。前回のケルベロスと違って知能が高いから慎重に行動すること。」

「リコが言った通り危険性が高い。なるべく迅速に対応することが要求される。だから……」

「俺らの力も必要だろ？」

アキトさんの説明を割って入った声はドアの向こう側から聞こえた。「ただいま。」

部屋に入ってきたのは男女の二人組だった。

「ケイ、ナツミ遅かったじゃないか。」

「ごめん、アキト。ケイのやつがいろいろやかしちやって。」
「うるせー。」

この人たちがケイさんとナツミさんのようだ。

「あれ、この子が新人の界？よろしくね。私はナツミ。で、こいつがケイ。」

「ナツミさん、ケイさんよろしくお願いします。」

「まあ、これで全員揃ったな。よし、ゲンリュウ、ユイ、界、ケイ、

ナツミはリコの指示通り動いてくれ。今夜中になるべく仕留めたい。

「……理解」……」

「こちらゲンリユウ班、配置についた。」

「了解。ケイ班は？」

「こちらもついている。」

「了解。二班ともそのまま待機お願い。」

現時刻午後8:35

住宅地内は人がほとんど見当たらない。例の事件もあつて誰も外に出ないのだろう。そう、僕を除いては。

「はあ、なんでこうなるんだよ……」

（そんなに不服か？）

「当然だろ？どこに好き好んでおとりなんてやるやつがいるんだよ。」

「

そう、僕は今、おとりとして出歩いているのだ。理由は簡単、犠牲者は男性だから。僕じゃなくてもいいのに。

「だいたい、こんなのにつっかかるわけ……」

（……前見るよ。）

「え？」

前から女性が歩いてきた。いや、人らしきものがあるいてきた。

「嘘……だろ……」

その女性らしきものはコウモリのような翼を持ち、左足は口バのような足で右足は何やら硬いものでできている化物だった。

（あれが、エムプーサか……）

（だろうな。）

「あら？今日はガキね。まあ、いいわ。早速頂きましょう！」

エムプーサは左足で地面を一蹴りすると、僕の目の前に現れた。

「!？」

「頂き!!」

「まずい!!」

「屈め!界!」

僕は後ろから聞こえた声に咄嗟に反応した。後ろから何かが飛んでくる音がした。

「!？」

エムプーサは慌てて後退し、間一髪で何かから逃れた。

「・・・最初から畏だったわけね。」

「間に合ったか。」

後ろにはゲンリユウさんとユイがいた。さっきのはゲンリユウさんの水刃撃だったようだ。

「界も構えろ。」

ゲンリユウさんに言われて僕も剣を出し戦闘準備に入った。

「まんまと騙されるなんて・・・これ程の屈辱は初めてだわ。全員殺してやる!!」

「させない。」

エムプーサが蹴り出す前にユイがエムプーサの周りに竜巻を出現させた。

「くそっ!」

「これでもう動けない。」

だが、これではこちらも攻撃は出来ないなので状況は変わらない。
(さて、どうするか・・・)

ー同時刻ケイ班ー

ケイたちは今、ゲンリユウ班から少し離れた地点にいた。

「おいおい、エムプーサ以外にもいるのかよ・・・」

「上半身は女、下半身は蛇、それに翼とは・・・まさに化物ね。」

ケイたちの前には一体の悪魔が立ちはだかっていた。

第八話　暗黒

鬼竜：黒髪で無造作に伸びた髪が特徴。自称最強の神の器。親を幼くして失ったため、医者の日渡に育てられた。16歳

第八話　暗黒

「ナツミ、さつさと倒していくぞ。」

「わかつてるって。」

ケイとナツミは悪魔に余裕の笑みを見せていた。

「あんたたち、あたしを誰だか知ってて言ってるの？あたしは

エキドナ。悪魔の中でも上位の方よ。あんまり舐めてかかると痛い目に合うわよ。・・・！？」

「悪いが、貴様に付き合っている暇はない。」

ケイはエキドナの腹に渾身の蹴りをいれ、エキドナはその場に崩れるように倒れた。

「ナツミ、いくぞ。」

ケイとナツミはその場を去り、ゲンリユウ班の元へ向かった。

「はあ、はあ、まさか不意打ちとは・・・。生きていただけで運がいいわ。」

エキドナはゆっくりと立ち上がる。

「・・・そのあんた、盗み見とは達悪いわね。」
「バレちゃったら仕方ないな。」

電柱の陰から一人の少女が現れた。

「あんた何者？」

「私は花岡すみれだけど、あなたには関係ないよね？ここで死ぬんだから。」

花岡すみれは笑顔で告げた。

「！？」

エキドナは急に息が出来なくなりその場でもがき始めた。エキドナは状況が理解出来ずただ苦しむことしか出来なかった。やがてエキドナは動かなくなり、消滅した。

（悪魔であろうと、神によって決められた運命には逆らえない。）

「うん。フォルトウナの言う通りだね。仕事も終わったし帰ろうか。」

「おい、てめエ、人のテリトリーで騒いでんだからお礼ぐらいさせるよ。あん？」

すみれはその場から逃げ出したかったが背後から近づいてくる恐怖に身体が動かない。

「さあ、始めようぜ。殺し合いをよオ！」

「ゲンリユウさん、ここはどうしましょうか？」

「私がここから水刃撃を放つ。界は反対側に回ってやれ。」

「了解」

僕は反対側に回ろうと走り出した。その時、

「ぐあ！？」

「キヤア！？」

振り向くと後ろでゲンリユウさんとユイが倒れていた。

「ゲンリユウさん！ユイ！」

「私を舐め過ぎていたようね。あれぐらいの竜巻なんて簡単に飛び越えられる。」

「くそおおおー！」

僕は怒りのままにエムプーサに剣を振りかざした。

「隙が多過ぎよ。」

エムプーサは僕の腹に右足で一発蹴りをいれた。

「ぐはあっ！」

僕は腹を抱えてその場に倒れた。

「私の右足は青銅で出来てるの。人間なんかの蹴りとは比べものにもならない。」

「くそっ……」

気持ちとは裏腹に僕の身体は動かなかった。

「さあ、次で終わりにしましょうか！」

「終わるのは貴様だ。」

「！？」

エムプーサが声に反応した時には既に遅く、エムプーサの身体は真つ二つに斬られた。

エムプーサの背後には大剣を振り下ろしたケイさんがいた。

「待たせたわね。」

少しあとからやってきたナツミさんが言った。

「……あそこに、ゲンリユウさんとユイが……」

僕はゲンリユウさんとユイが倒れている方を指差した。今の僕は手を動かすのも一苦労だった。

「ケイ、早く戻って手当てしないと。」

「ああ。」

ーズドンッー

その時何かが凄い勢いで路地から飛んできた。

「！？」

「何？・・・女の子！？」

ナツミさんはその正体に驚愕の表情だった。僕もかろうじて姿を見ることができた。

「・・・花岡さん？」

僕は状況が理解出来なかった。なぜこんなところに花岡さんがいるのか。出来れば信じたくない事実だった。

「！？こいつが、花岡すみれ・・・？」

？今、ケイさんは何て言った？僕の聞き違いだろうか。

「・・・ケイさん、今なんて？」

僕はケイさんに聞き返したが、ケイさんの耳には届かなかった。

「おいおい、もうギブとかないだろ？もう少し愉しませてくれよオ。」

「

路地から一人の男が現れた。そいつの目はたして人間の目と呼んでいいのだから。そいつの目はとても人間の目とは思えないほど冷酷な目だった。

「あ？なんだお前ら？」

その男はようやく僕たちの存在に気付いた。

「貴様は鬼竜だな？」

ケイさんは強めに言う。

「俺も大分有名な人になったじゃねーか。」

鬼竜という男は笑いながら言った。

「ナツミ、すまねーな。」

ケイさんそう言いながらナツミさんに近づくと、ナツミさんの首の後ろを叩いた。

「！？」

ナツミさんはケイさんの不意打ちに対応出来ずにそのまま倒れた。

「ケイさん・・・何を・・・」

僕は必死にケイさんに話しかけるが、僕の声は届かない。

「おいおい、仲間割れかよ。」

鬼竜はまた笑いながら見ていた。

「貴様を倒して花岡すみれを回収する。」

「てめえの目的はこの女か？ならさっさと持っていけと言いたいとこだが、生憎この女は今俺と遊んでんだよ。邪魔させねーぞ！！」
そう言つて鬼竜はケイさんに手を向けた。

「させねー！」

ケイさんは鬼竜に向かって大剣を振り下ろした。

「！？」

本来ならば鬼竜の身体を引き裂いているはずの大剣は黒い何かに飲み込まれていた。

「俺の力の前にはそんな攻撃、無意味なんだよ！！」

ケイさんは強引に大剣を引き抜くと、鬼竜と距離をとった。

「貴様・・・」

「俺の暗黒世界は最強だ！！」

僕は鬼竜に今までに無いほどの恐怖を感じた。

第九話　波乱

神殺し（ゴッドブレイカー）：神の器を専門とする殺し屋集団。六人で構成されている。敵を倒すためなら手段を選ばない。

悪望のマグネス：神殺しのリーダー。赤毛のオールバックが特徴。ある野望をもって行動している。35歳

令縛のリリア：神殺しの女メンバー。ピンクの髪で肩ぐらいの長さで非常に無口。神殺し唯一の神の器。制定者と呼ばれている。10歳

魔槌まついのアルク：神殺しのメンバー。背中まで伸びるストレートの黒髪が特徴。話すとき笑う癖がある。17歳

魔槍まそつのバルトス：神殺しのメンバー。坊主で190cmはある巨漢。アルクの面倒を見ている。25歳

魔弓まきゆうのケリー：神殺しの女メンバー。背中まで伸びる金髪パーマが特徴。語頭に「ねえ、」をつけるのが癖。19歳

ケイ：神殺しのメンバー。神殺しのスパイとして神器同盟に潜入。

第九話　波乱

「どうしたア？かかってこいよ！」

鬼竜は余裕の表情でケイさんを挑発している。ケイさんはその言葉を無視して冷静に攻撃をしていく。

「俺の暗黒世界は全ての攻撃を吸収する！」

ケイさんは大剣を振り回すが、鬼竜には傷一つも与えられていない。ケイさんに焦りの表情が見えてきた。

「つたく、さつさと雑魚はうせろ！！！」

鬼竜はケイさんの一瞬の隙を突き、腹に蹴りを入れた。

「くっ！！」

ケイさんはそのまま後ろに倒れた。

「はっ、この程度の雑魚に付き合ってる暇はねえ。」

鬼竜はそれ言い残すとその場を去ろうとした。

「・・・待てよ、クズ。」

ケイさんは立ち上がり鬼竜を睨みつける。

「・・・殺されたいみてーだな。」

鬼竜も今までに無いくらい鋭い目つきで睨み返す。

「まさか人間風情にこの力を使うとは思わなかった。」

「あ？どういう意味だ？・・・！？」

鬼竜が聞き返した時にはケイさんは鬼竜の目の前にいた。ケイさんは隙だらけの鬼竜の腹を殴った。

「・・・くそ！」

「まだまだいくぞ。」

ケイさんはたて続けに鬼竜を殴りつける。ケイさんの攻撃の速さに鬼竜はただやられるしかなかった。最後は鬼竜の顔を鷲掴みにして持ち上げた。

「・・・何者・・・だ？」

鬼竜の声に覇気は感じられなかった。

「半神だ。貴様らとは格が違うんだよ！」

ケイさんはそう言っていると、鬼竜をそのまま地面に叩きつけた。

鬼竜は完全に動かなくなった。

「さて、いくか。」

ケイさんは花岡さんに近づき、花岡さんを担いだ。

「待って・・・花岡さんをどうするつもりですか・・・？」

「・・・。」

ケイさんは僕の問いに答えずに去った。

「待つ・・・て・・・。」

僕の意識はそこまでだった。

「・・・僕はあの後一体・・・」

目が覚めたら僕はデザリアの自室のベッドの上にいた。横にある椅子にはアキトさんが座っている。

「界、君はあの時意識を失ったんだよ。僕が慌てて現場に向かった時にはゲンリユウとユイは目を覚ましていた。倒れていたのは君とナツミだけだった。」

「！？ケイさんは！？」

「落ち着いてくれ。・・・界、あそこで何があった？知っているのは君だけなんだ。」

アキトさんは僕を落ち着かせるように僕の肩を掴む。

「・・・ケイさんが鬼竜についていうやつと戦って・・・その後、花岡さんを連れて行った・・・」

僕は今どんな顔をしているだろうか。きっと酷い顔だろう。

「・・・そうか。」

アキトさんはつぶやくように言った。

「僕は友達一人も救えなかった。動くことすら出来なかった。もう何も失いたくない・・・」

僕はいつの間にかボロボロと涙を流していた。

「じゃあ、取り返せばいい。」

「え・・・」

「界には取り返せる力がある。失わないように守るんだ。」

アキトさんの笑顔が今まで以上に輝いて見えた。

「……でも……」

しかし既に花岡さんは攫われたのだ。どうしようもない。

「よく考えてみてよ。わざわざ連れ去ったってことは殺す気はない
って事だよ。だからまだ時間はある。」

「あ……」

「今、リコが逃走ルートを探してるから動くのはそれからだ。皆の
怪我も治さないといけないし。」

「……はい。ありがとうございました。」

「じゃあ、ゆつくり休んで。」

アキトさんはそう言って部屋を出た。

同時刻―新木港倉庫―

ケイはすみれを抱えたまま新木市の港にある倉庫を訪れた。

「ケイ、ただ今戻った。」

ケイは倉庫の扉を開けて言った。

「ケイ、貴様の背負っているものは？」

「花岡すみれを連れて来た。」

「ほう……。」

「これで始められるだろ？」

「これより、神殺し（ゴッドブレイカー）は神器同盟の殲滅を開始
する！」

倉庫の奥には神殺しと言われる

五人がいた。

「アルクは新庄香奈恵を探し、見つけ次第消せ。」

神殺しのリーダーであるマグネスが横に座っているアルクに言った。

「ケケツ、オレだけ仲間外れかよ。」

アルクは言葉とは裏腹に、嬉しそうだ。

「アルク、あまりハメを外すではないぞ。」

アルクの後ろに立つバルトスが言う。

「ケケツ、分かってるよ。」

アルクはそう言って倉庫を後にした。

「リリア、花岡すみれの神術をを封印しろ。」

リリアと呼ばれる少女は黙ってすみれの元に近づく。ケイも黙ってすみれを地面に下ろした。リリアはすみれの身体にそっと手を置いた。

「我、この者の神術の行使を禁ずる。」

リリアの声と共にリリアの手は青い光に包まれ、声が途絶えると、光も消えた。

「ねえ、相変わらずリリアの力便利ね。」

リリアがいた位置の隣に腕を組んで立っていた女性、ケリーが羨ましそうにリリアを見つめていた。

「これで花岡すみれの神術も恐れることはない。潰しに行くぞ。」
マグネスの声は今まで以上に低かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8981z/>

僕は神を知っている

2012年1月10日06時47分発行